

令和 6 年 5 月 10 日現在

機関番号：32683

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K20060

研究課題名（和文）少数言語パラオ語のデジタルアーカイブをめぐるオーラリティ研究

研究課題名（英文）Making digital archives for small languages of Palau islands

研究代表者

紺屋 あかり（KONYA, Akari）

明治学院大学・国際学部・講師

研究者番号：90757593

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、グローバル化の状況下において次世代継承が危惧されているオセアニア少数言語のパラオ語（話者人口2万人）を対象として、言語継承・教育のためのデジタル・コンテンツを作成する実証的地域研究である。ここでいうデジタル・コンテンツとは、村落歴史うた（詠唱/チャント）の映像資料、の歌詞に含まれる古典パラオ語の辞書ツールを指す。また、本研究では、科学的分析（コンピューティング、Praat：音声解析）を活用した、オセアニア無形文化の持続的発展に向けた具体的方法論の構築を目指す。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究ではパラオ語を対象として、言語継承・教育のためのデジタルアーカイブ資料を作成することを目的とする。従来のような文字保存という限定されたアプローチだけでなく、デジタル・コンテンツを活用した継承の方法論を新たに構築する。さらに、外来言語との接触状況だけでなく、希少・少数言語理解の深化を目指す。

無形文化は、従来テキストとして一元的に記録されることが多かった。本研究では、アニメーションやコンピューティングなどの科学的技術を活用して、より立体的に記録・解析する。音声や音節などといった身体技法をも含めた次世代継承ツールの作成することで、従来の文書化では継承し得なかった言語情報にも対応させる。

研究成果の概要（英文）：This study targets the Palauan language, a minority language group of Oceania with a speaker population of 20,000. Today Palauan language is under threat for transmission to the next generation due to the reciprocity of the literate culture as well as the increasing number of English speakers. The digital contents here refer to (1) video materials of village historical chanting and (2) dictionary tools of classical Palauan contained in the lyrics of (1). In addition, this study aims to develop a specific methodology for the sustainable development of Oceania's intangible culture through the use of scientific analysis (computing, Praat: speech analysis).

研究分野：文化人類学

キーワード：オーラリティ デジタルアーカイブ 少数言語 パラオ語

1. 研究開始当初の背景

【背景】母国語(パラオ語)離れによる無形文化の衰退状況

現在パラオでは、インターネットの普及や海外移住経験などを通じて、国内における英語話者が増加傾向にある。近年では「一人の老人が亡くなれば村の歴史の半分が消える」などと言われ、パラオ語の次世代継承が危惧されている。そのため、オーラリティ文化や言語継承をめぐる早急な対応策が求められている。

オセアニアは元来の無文字社会であり、今日にも豊かなオーラリティ文化を有している。しかしながらユネスコ無形文化遺産登録件数は2件(2019年10月時点)と、他地域と比較しても極端に登録数が少なく、その将来的展開が見込まれている。現在も、言語継承についてユネスコをはじめとする国際機関を巻き込んで(に巻き込まれながら)各島嶼国で議論が続けられるが、島の固有言語や無形文化の保護・継承方法が未だ確立されておらず、多くの課題を残している。

そこで本研究ではオセアニアの少数言語の継承をめぐる今日的課題/対応策とは何か?という点を中心的な問いとして、それらに実証的にアプローチすることを目的とした。

【課題1】ナショナルレベルでの無形文化「文書化」の失敗(1970年代)

米国信託統治領後期に入ると、パラオの人類学者が引率した文化促進運動として、ナショナルレベルで口頭伝承(歴史語り、神話、伝説、諺など)の文書化に向けた国内初の全島調査が行われた(1968-74)。しかし、6年間の歳月を経て採集されたものがその後、文書化されることはなかった。無形文化の取り扱いをめぐってはタブーなどの禁忌が多く、秘伝性も高い。これまで親族・村落内という限定された関係間において管理されてきた知的財産の公開性をめぐっては、今日に至るまで議論が繰り返されている。

【課題2】少数言語研究の手薄さ(「借用語」研究への偏り)

植民地経験に伴い、パラオ語は一世紀のうちに4カ国語(スペイン・ドイツ・日本・英語)と接触してきた。それら歴史的背景を受けて、これまでのパラオ語を対象とする言語学研究では、借用語(特に日本語からの借用語)や外来言語との接触状況を分析するアプローチが中心とされてきた。その一方で、マラヨポリネシア語派の中でも極めて特異な言語的特徴(オセアニア地域で唯一東南アジア諸語グループに含まれる)を持つパラオ語そのものの言語体系的理解については、未だ議論の余地を残している。パラオ語をめぐっては文法書などの言語教材はなく、現存する辞書[Josephs 1977ほか]の語句もごく限られたものである。また同辞書には、古典パラオ語は含まれていない。

Josephs, Lewis S 1977 *New Palauan-English Dictionary* (Based on the *Palauan-English Dictionary* by Fr. Edwin G. McManus, S.J.), Honolulu: University of Hawaii Press. Augusta N. Ramarui 2000 *Kerresel A Klechibelau (Palauan Language Lexicon)*, Belau National Museum.

2. 研究の目的

上記の課題1, 2を踏まえ、本研究ではパラオ語(話者人口2万人)を対象として、言語継承・教育のためのデジタルアーカイブ資料を作成することを目的とする。そのことによって、従来のような文字保存という限定されたアプローチだけでなく、デジタル・コンテンツを活用した継承の方法論を新たに構築する。さらに、外来言語との接触状況だけでなく、希少・少数言語理解の深化を目指す。

3. 研究の方法

■研究対象

本研究では、口頭伝承の中でも特に、詠唱（エソルス/ *chesols*）を分析対象とする。パラオの口頭伝承とは、語り・詠唱・踊り・図像の4形態で実践されるもので、神話、伝説、歴史、諺、伝統的知識などを総称して指す。詠唱はそれら口頭伝承に節をつけてうたう語りの一形態で、パラオ無形文化の中でも貴重な知的財産として認識される。

■なぜ「詠唱」なのか？

詠唱は、口頭伝承の身体的記憶法として古くから受け継がれてきた実践である。また、詠唱には古典パラオ語が多く含まれているため、普通の会話で使用する機会の少ないパラオ語単語を学習するうえでも非常に優れた教材となり得る。

■どこまで明らかにするのか

- 1) パラオ全16州（全5島）で採集する詠唱の体系的理解及び地域間比較
- 2) 1970年代以降から現在までのパラオ詠唱をめぐる音声解析・定量化
- 3) 詠唱に含まれる古典パラオ語の抽出 古典パラオ語表を作成
- 4) コンピューティングを使用した古典パラオ語の科学的分析・類型化

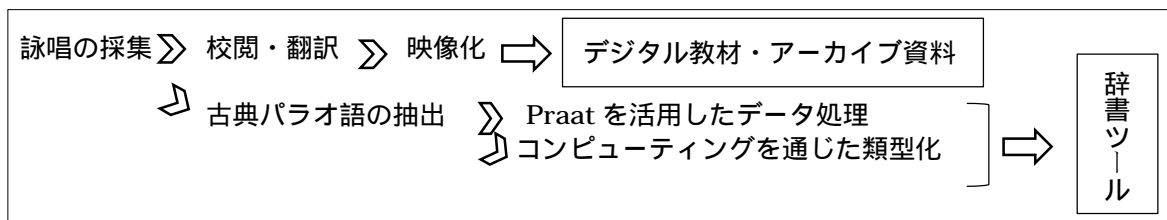
■研究成果の地域社会への還元

本研究の実施により採集した各州16種の詠唱は、一次資料及びアーカイブとしてベラウ（パラオの呼称）国立博物館図書館及びパラオ政府芸術文化局図書館に保存する。詠唱の映像資料はパラオ教育省と共同して、国語教育に関わるテキスト教材として活用する予定である。また同博物館内に、採集した一部のアーカイブ音源・映像を展示して公開する。

フィールドワークと科学的データ分析を通じたオーラリティ研究の新手法を構築

■研究の流れ

本研究は、下記の図にあるような研究の流れで、採集・科学的分析・アーカイブ化までを包括的にすすめる。



4. 研究成果

研究計画では、アーカイブの作成までを目標としたが、実際に研究を進めていくなかで、特にパラオ語校閲や翻訳の作業において、予想していた以上の作業時間を要することとなり、一部資料を作成するに終わった。しかし、パラオ語のアーカイブ化をめぐる課題が明らかとなったことは、今後の研究の展開において大きな発見であったと言える。

まず、今日パラオ語のアルファベットの識字法は、新旧入り混じっており、個々人によってその手法が大きく異なるといったある種の混乱状況にある。こうした問題を踏まえ、昨今、パラオ語の新しい識字法の教育・運用をめぐる議論や整備が活発化している。新しい識字法では、英語の文法に沿わせたものであり、一部ではこれまで使用されてこなかった省略形なども使用されている。そのため、まずは採集した口頭伝承を、これら新しい識字法に倣って書き換えるという作業が必要となった。しかし、現状では新しい識字法が定着しているとは言えず、さらには世代によって識字法が異なるという現状も多く散見される。本研究では、次世代継承を目的としたアーカイブ資料の作成という趣旨に伴い、新しい識字法を採用した。しかし、アーカイブ資料として最良の識字法は何か、どのような手法でテキスト化するのかという点については、議論の余地

が残されている。

次に、翻訳をめぐる課題である。やや抽象的な表現にはなるが、元来の無文字社会であるパラオにおいて、ことばとは、意味というよりも、ある特定のイメージとして認識される傾向が強い。そのため、口頭伝承の解釈として、そこに使用されている単語一つ一つの意味を説明するだけでは、不十分となる。むしろ、単語は別の単語と連結しながらイメージをつくっていくので、直訳の意味がそのまま適応されることの方が少ない。それら語りの解釈をめぐる問題を踏まえて、数々の隠喩の解説、実際の風景の解説、歴史的背景や、伝統的知識の注釈を追加する作業などを要した。また、翻訳に際しては、複数名に作業を依頼して合同で進める必要もあった。それは、一人ひとりの語りの解釈方法が異なっていないかを確認するためであった。実際に翻訳の作業の過程においては、予測したように、解釈が異なるという場合も生じた。その際は、翻訳に別途解説をつけるなどといった作業も生じた。

これら、パラオ語校閲、英語への翻訳という作業が、計画していた以上に時間を要するものとなったことを受けて、想定していたすべての作業を終えることはできなかった。採集的な研究成果としては、およそ 80 の詠唱のデータ化を完了するに至った。今後、研究協力機関であるペラウ国立博物館と協働しながら、これらデータをいかに運用していくのかについて、議論を進めていきたい。

なお、本研究と関連した研究成果は、オセアニア地域の言語学雑誌等で論文にて報告した。また関連する国際学会での口頭発表を行った。また今後も、現在執筆中の、論文、文献等を通して、本研究の成果を報告していく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Akari KONYA	4. 巻 14
2. 論文標題 Four Stones: The Concept of Time and Space in Palauan Mythology	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Language and Linguistics in Oceania	6. 最初と最後の頁 22-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Akari KONYA	4. 巻 14
2. 論文標題 Four Stones: The Concept of Space and Time in Palauan Mythology	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Linguistics and Language in Oceania	6. 最初と最後の頁 22-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 紺屋あかり	4. 巻 363号
2. 論文標題 パラオのタロイモと魚をめぐる「共食文化」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 一般社団法人地球・人間環境フォーラム『情報誌グローバルネット』	6. 最初と最後の頁 16 - 17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 1件／うち国際学会 2件）

1. 発表者名 紺屋あかり
2. 発表標題 西太平洋パラオ社会にみる先住性とミックス：ヒトの包摂と排除をめぐる
3. 学会等名 ミックスをめぐる帰属と差異化の比較民族誌 オセアニアの先住民を中心に 国内共同研究，国立民族学博物館
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Akari KONYA
2. 発表標題 Post-postcolonial Nostalgia Toward Japan in the South Sea, Palau
3. 学会等名 Greenland-Denmark 1721-2021 conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 紺屋あかり
2. 発表標題 石と女性：パラオの贈与財ウドウド (udoud) をめぐるいくつかの変化について
3. 学会等名 2020-2024 学術変革領域研究 (A) 生涯学の創出 - 超高齢社会における発達・加齢観の刷新 C02ヒトモノ班 (文化人類学) 研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Akari KONYA
2. 発表標題 Stonescapes: The Concept of Time and Space in the Myth of Palau
3. 学会等名 Va Moana: Space and Relationality in Pacific Thought and Identity (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Akari KONYA
2. 発表標題 Stone in the Deep Ocean: The Concept of Time and Space in the Myth of Palau
3. 学会等名 Association for Social Anthropology in Oceania (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 紺屋あかり
2. 発表標題 パラオにみることばの物象化と海の底の石
3. 学会等名 日本オセアニア学会関東例会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 紺屋あかり
2. 発表標題 ポストコロナル・ノスタルジア-パラオ老人会と日本人観光客との交流の場を事例に
3. 学会等名 国立民族学博物館共同研究課題研究会(グローバル化時代における「観光化/脱観光化」のダイナミズムに関する研究)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 石森大知, 黒崎岳大	4. 発行年 2023年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 333
3. 書名 ようこそオセアニア世界へ	

1. 著者名 山口裕之, 橋本雄一(編)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東京外国語大学出版会	5. 総ページ数 291
3. 書名 地球の音楽	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------